

月刊西谷会計

平成28年12月号



【所長のDVDコレクションより～オリックス 宮内義彦氏～】

本日紹介するのはオリックスの宮内義彦さんです。今から30年近くも前になる1989年の収録ビデオで、オリックスがレンタルや金融などリースの周辺業務に進出し、阪急ブレーブスを買収してオリックス球団を立ち上げた頃のお話です。古いビデオですが、多角化や人材確保のお話については、現在でも十分に通じるところがあります。

オリックスは、もともとはベンチャー企業です。アメリカでリースというものが流行っていると聞いた、国内の銀行3社が共同出資で始めたのがオリックスの前身のオリエントリースでした。オリックスが繁盛しているということでリース業界は新規参入が進み、25年たった頃には311社も存在するようになったそうです。参入する会社が増えて、収益率はどんどん低下してきたため、オリックスは多角化の道を模索することとなりました。

多角化は「隣」に目を向けることで進めたそうです。例えば、車を例にとると、保守、保険、事故対策の交渉など、全部ひっくるめた商品にすると、人気ができることに気づいたそうです。そうすると、車屋さんのノウハウが必要になってくる。車屋に注目すると、顧客の中にはもっと短い期間で借りたい人がいる。そこでレンタカーを始める。車は数年たつとポンコツになるので、中古車をどうすればよいかという話もでてくる。ディーラーに引き取ってもらうのでは間に合わないから、中古車事業にも進出する。リースと中古車販売は全く関係ないが、隣に行ってみるとその隣が見えてきて、いろんな分野に事業が広がったそうです。戦略的に多角化を進めてきたわけではないのだとか。

このビデオの収録当時は人手不足だったようです。四年制大学の新卒男子の採用が主流だった当時、宮内さんは人が余っている層として次の3つを挙げています。一つは、四年制大学の新卒女子。この当時既に、オリックスでは営業職の30%が新卒女子で、管理職や海外駐在員をする女子社員もいたそうです。二つは、子育てが終わった中年女性。生命保険の外交と流通業界のパートではこの層を既に活用しているが、まだまだ補助的な人材としか活用していない、パート的でない働き方をつくと企業に大きな戦力となるはずだと宮内さんは述べています。3つは、熟年のオジサン。日本は一度大企業を離れると、人生もとに戻れないシステムになっている。人生経験の豊富さと比較して恵まれた立場に就いていない人はたくさんいると宮内さんは述べています。今でも十分通用するお話です。

大前提として、手持ちの人員を120%につかっているということです。120%使わないで、人手不足といっている社長はたくさんいるのだとか。若手のバリバリなんていない。必要な能力と獲得可能な人材をよく考えるという言葉が印象的でした。

**新生
オリックスの
多面化戦略**

(証券・レンタル・M&A...で多角化・国際化)

宮内義彦
オリックス 社長

若さ溢れる異色の多面経営を展開。
隣地進出志向・M&A・
市場両面化・多国籍化で
総合リース業界No.1

日本経営合理化協会 1989年収録

【所長の本棚より～China 2049～】

本日紹介するのは「China 2049」、読んで非常に憂鬱な気分になった本です。1949年に建国した中華人民共和国が100年がかりの長期戦略で世界制覇を目論んでいるという内容です。著者は米国人のマイケル・ピルズベリー博士、中国専門家として著名な方で、米国政府の対中政策にも深く関わってきた方です。

アヘン戦争以降、中国は西洋諸国の後塵に甘んじてきました。再び世界の中心となるために、毛沢東、鄧小平ら歴代の指導者は弱い中国、帝国主義の犠牲となったかわいそうな中国を演じ続け、アメリカから巨額の援助を獲得します。長期的な視点で「勢」をじっくりと待ち、胸のうちがばれないように、相手の力を利用して、中国は着々と力をつけてきました。まさに春秋戦国時代の権謀数術、孫子や兵法三十六計、資治通鑑の世界です。

もう野心がバレても大丈夫となった段になってようやく、本音がポロポロこぼれるようになってきた、アメリカはようやく騙されていたことの気づいたというのが著者の見解です。実際、アメリカは中国人のモノの考え方を全く理解できていませんでした。国際機関に加盟はしますがごね得で義務を果たさず、反米的、独裁的な国家を支援して西洋的価値観の弱体化、アメリカの権威喪失を図ってきたと述べています。

実際のところ、日本もさんざんODAを供与してきました。お金も技術もたくさん提供してきましたが、全て中国に吸収されてしまって、逆に日本の産業が脅かされるようになってしまいました。「中国はまだまだ遅れている、日本の環境技術は中国にとってまだまだ魅力的だ」と主張する評論家もいますが、そんなことをいっていると、そのうち環境技術も吸い取られてしまうでしょう。

最近の中国はGDPの成長率もかつてほどの勢いはなく、集計数字がおかしいとか、バブル崩壊も囁かれています。そんなニュースを聞いて安心したり、ホッとしている人もいるかもしれませんが、でも、ちょっと待って下さい。その元データは中国政府が公表している数字です。著者の考えが正しいとする、勢いを失った数字も、油断させるための戦略なのかと疑ってしまいます。



【薬剤師 夏子の部屋～スーパームーン～】

朝の空気がめっきり冷たくなりました。でもそれが清々しく感じられるのも雪がまだ無いからですね、夏子です、こんにちは！さて、先日の11月14日はスーパームーンでした。スーパームーンってなんでしょう？

Wikipediaによると、「満月または新月と、楕円軌道における月の地球への最接近が重なることにより、地球から見た月の円盤が最大に見えることである。天文学的に外からの視点で説明すると、太陽-地球-月系において、月が地球に対する近点(近地点)にあると同時に、太陽と地球に対し月が衝(望)となった時の月のことである。ただし、「スーパームーン」という用語は天文学ではなく、占星術に由来する。」

えっえー、占星術用語なんですかー?! 驚きました。Wikipediaは何でも知ってますね。いつもよりもおつき明るく見える月がスーパームーンって事の様です。13日に車の窓から見た月がやけに大きく、夕方だったので白っぽかったのですがすごい存在感でした。高く昇る前の夕方の月なので建物や景色の近くにあり、大きさが際立っていました。「今日のお月さまは大きいねー。」と言ったら「きっとスーパームーンだよ。」と言われ、そんなにスーパームーンが頻繁にある事かしら? と思ってしまいました。その通りでした。ごめん!

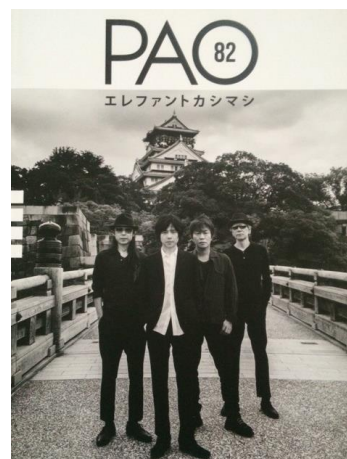
そして、翌日のスーパームーン本番です。真っ暗になってから月を見上げたら、オレンジ色の月は明るく輝いていました。いつもと変わらない月に見えました。スーパームーンとは知らずに自分達の感覚で感じた月の方が大きく見えた事がなんか嬉しかったです。占星術に由来するということは何かお願い事等するべきだったでしょうか? 全く思いつきませんでした。

でも、大きい月は近すぎて少し怖かったです。

私の大好きなロックバンド、エレファントカシマシの曲には月が出てくるものが大変多いです。曲目はもちろん歌詞にもとても多く月が登場します。太陽や雨や風等季節の描写も多いのですが、私の分析では月がダントツ一位です。

エレファントカシマシ最大のヒット曲は「今宵の月のように」という曲ですし、「月夜の散歩」「月の夜」などタイトルに月が出てくる曲、また「風に吹かれて」「化ケモノ青年」など曲中に月という歌詞が出て来る曲など、月が出て来る曲は多いのです。ボーカルの宮本さんが作詞をしているのですが、月にはとてもロマンを感じているのでしょうか。

今回長年エレファントカシマシのファンをやっている私がおすすめする月の曲は「月と歩いた」という初期の曲です。タイトルからして叙情的です。スローなバラードと言う感じで始まりですが、途中からはボリューム注意です。初めて聞く人には初期エレファントカシマシ独特のなんじゃこりゃ感が強いかもしれませんが、最後には月と自分の世界、ロマンチックな世界を感じてもらえると思います。



西谷俊広 税理士事務所

〒030-0821 青森市勝田2-6-18

<http://www.248nishiya.com>

TEL 017-774-2315

E-mail [nishiya-kaikei-jimusyo](mailto:nishiya-kaikei-jimusyo@tkcnf.or.jp)

@tkcnf.or.jp